

前田夕暮の作風の変遷 服部崇

「角川短歌」に連載が続いている坂井修一「かなしみの歌びとたち―近代の感傷、現代の苦惱―」を毎月楽しみにしている。第二十一回（二〇二二年九月号）は「夕暮の豹変」と題して、前田夕暮の作風の変遷を取り上げている。坂井は、夕暮の作風の五度にわたる転換を前田透著『評伝 前田夕暮』（桜楓社、一九七九年）に沿って整理・概観している。坂井が引いた歌のなから参考までに一首ずつここに引いてみる。

第Ⅰ期 明星浪漫主義 1902（19歳）～1906（23歳）

・この時期の歌は引用されていない。

第Ⅱ期 自然主義 1907（24歳）～1912（29歳）

・魂たまごよいづくに行くや見のこししうら若き日の夢に別れて

『収穫』

第Ⅲ期 外光派 1913（30歳）～1919（36歳）

・向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちひささよ

『生くる日に』

第Ⅳ期 「天然更新」の歌風 1923（40歳）～1928（45歳）

・馬夫ばぶの妻は足洗ふことの物うくて泥足を犬に舐らせにけり

『虹』

第Ⅴ期 自由律短歌 1929（46歳）～1941（58歳）

・五月の青櫂の若葉が、ひとときはこの村をあかるくする、朝風！

『水源地帯』

第Ⅵ期 定型復帰 1942（59歳）～1951（68歳）

・雪の上に春の木の花散り匂ふすがしさにあらむわが死顔は

『夕暮遺歌集』

夕暮の作風の変遷を際立たせるにはもう何首ずつか引きたいところである。他方、坂井は「（第Ⅱ期から第Ⅵ期の）五つの時期を通じて、夕暮が大きく違うものになっていったとは思えないのである。ときどきで表現法や方法論（中略）が大きく変化したとはいえ、歌の内実は驚くほど変化していない」と書いている（144頁）。何が変わって何が変わらないのか。興味をひかれて、筆者も前田透著『評伝 前田夕暮』を読んでみることにした。前田透は「追隨者によって自己の歌境が荒らされそうになったとき、それを振り切って夕暮は転換することを常とした」と書く（137頁）。同時に、「自己の行きつまりを突破するだけでなく、短歌という文学形式の命運を切り拓いて行こうとする意図が平行して強かった」、「つねに自己の作品行動を短歌の将来に係わらせて考えていたのではないだろうか」、「近代短歌史形成に実質的に与って来たという自覚から来る責務のようなものを痛感していたのだろう」と評している（すべて251頁）。短歌に向き合う姿勢は変わらなかったといふことか。

夕暮自身は、「人間は生ける限り、仮令死の直前でもこれはいかぬと思つたら改めるがよい。改めたら新しく出発するがよい。それが人間としての生きる道であり、その生きる道を作品行動するるのが短歌の道である」と書いている（『詩歌』昭和18・10編輯後記、同じく251頁より引用）。かっこいい。